

運動遊びに関する基礎的研究 —保育者が持つ運動遊びのイメージとは—

木戸 貴弘*

Basic Research on Exercise Play —What is the image of Exercise Play that Childcare Workers have?—

by
Takahiro KIDO*

要 旨

本研究は、保育・幼児教育施設に勤務する保育者を対象として「運動遊び」について焦点を当て、自由記述式の回答からその内容を整理し、今後の運動遊びに関する統一した定義や概念の生成に向けた基礎的データを得ることを目的とした。対象者は、保育者を対象に実施されたキャリアアップ研修会の参加者に参加した73名とした。運動遊びについて、保育者が持つイメージや日ごろ意識している思い、考えなどについて質問紙調査を行った。結果から、頻出分析では、肯定的な情意面の言葉や子どもの行動姿勢に関する言葉が頻出上位の語として出現しキーワードとして挙げられた。階層的クラスター分析の結果から、①日常生活や保育との繋がり、②年齢に応じた遊びの提供、③人間関係の広がり、④肯定的な動機付け、⑤身近な環境との自由な関わり、⑥自発的な活動への導き、⑦安全、規範意識の涵養の7つのクラスターが抽出された。これらのクラスターは子ども・子育て関連三法令に則った内容が複数確認され、運動あそびに焦点を当てた本研究においても保育者は三法令との関連を意識し、運動遊びに対してイメージを持っていることが明らかとなった。

Key Words：運動遊び、保育者、頻度分析、階層的クラスター分析

1. はじめに

「幼稚園における教育は、遊びを通しての指導を中心に行うことが重要である。」¹⁾と述べられるように、保育の活動の中には様々な遊びが存在する。幼児期の遊びの一つとして運動遊びがある。運動遊びは幼児の健全な発育発達のみならず、物事に取り組む積極的な態度や意欲を育み、その後の人生を豊かに生きるための基礎を作る重要なものと考えられる。

しかしながら、運動遊びという用語については類似する用語が複数存在し、例えば体育遊び、スポーツ活動、運動などがある。これらの用語に対応する実際の動きや動作はほぼ同じであると考えられており大きな区別はない。山本ら²⁾はこの現状について、用語が様々あるにもかかわらず、対応する実際の動きや動作が同じであることは概念の曖昧さを生み、結果として、対応する動き・動作の構造が不明確であることを指摘している。これら、用語の曖昧さが子どもたちの健全な心身の発育発達に影響を及ぼすことも懸念される。そのため、今後それぞれの

*崇城大学総合教育センター 助教

用語に対する定義やそのイメージを整理していく必要がある。

運動遊びの用語について、これまでの先行研究では、「身体全体を使って活動的に遊ぶ遊び」「遊びの中で活発に身体を使う遊び」「走ったり、跳んだり投げたりといった運動的な遊び。」³⁾、や「遊びを通した身体活動」⁴⁾、「幼児が楽しみながら、熱中して取り組む姿を見せる『あそび』」⁵⁾等と説明されているが、統一された内容が示された報告はない。また、実際に保育・幼児教育施設に勤務する保育者を対象とした「運動遊び」への定義やイメージに関する報告はほとんど見受けられない。日々の保育活動において実践される運動遊びの考え方や方向性のずれを引き起こさぬよう、まずは、保育者が持つ運動あそびへの考えやイメージを整理しておくは意義があり重要なことである。

そこで本研究は、保育・幼児教育施設に勤務する保育者を対象として「運動遊び」について焦点を当て、自由記述式の回答からその内容を整理し、今後の運動遊びに関する統一した定義や概念の生成に向けた基礎的データを得ることを目的とした。

2. 方法

(1) 対象者

令和3年8月～10月にかけて大分県内の保育者を対象に実施されたキャリアアップ研修会の参加者に対し、研修終了後にアンケート調査の目的、内容を説明した後、同意を得て回答を得た73名を対象者とした。対象者の勤務施設、保育・教育歴を以下の表1、2に示す。

(2) 質問内容

運動遊びについて、保育者が持つイメージや日ごろ意識している思い、考えなどについて自由記述式による質問紙調査を行った。なお、回答は無記名で行なった。

(3) 分析方法

自由記述は、分析者の恣意的な解釈を排除し、客観的かつ全体的な傾向を把握するため、

KHCoderを用いてテキストマイニングによる分析を実施した。テキストファイルの各行に1文ずつ入力した自由記述から、頻出語の抽出および階層的クラスタ分析を行った。

表1 対象者の勤務施設

勤務施設	人数	割合
幼稚園	9	12.3%
保育所	14	19.2%
認定こども園	50	68.5%
合計	73	100.0%

表2 対象者の保育・教育歴

勤務年数	人数	割合
1～5年	10	13.7%
6～10年	28	38.4%
11～15年	13	17.8%
16～20年	11	15.1%
21年～	11	15.1%
合計	73	100.0%

3. 結果

(1) 頻度分析

助詞や助動詞などの一般的な語は除外され、すべての名詞、動詞、形容詞が抽出された。分析対象となった文は201文、総抽出語は1385語であった。頻度分析のうち8回以上出現した

表3 自由記述における頻出語及び出現頻度

順位	抽出語	出現回数	順位	抽出語	出現回数
1	子ども	82	17	行う	13
2	遊び	50	18	活動	11
3	楽しい	42	18	考える	11
4	思う	37	20	ルール	10
5	運動遊び	34	20	日常	10
5	楽しむ	34	22	コミュニケーション	9
5	体	34	22	自然	9
8	運動	22	22	社会性	9
9	動かす	22	22	取り入れる	9
10	自発的	18	26	身	9
11	主体的	17	26	生活	9
11	大切	17	26	発達	9
13	遊ぶ	15	29	安全	8
14	一緒	14	29	使う	8
14	取り組む	14	29	思える	8
14	保育者	14	29	指導	8

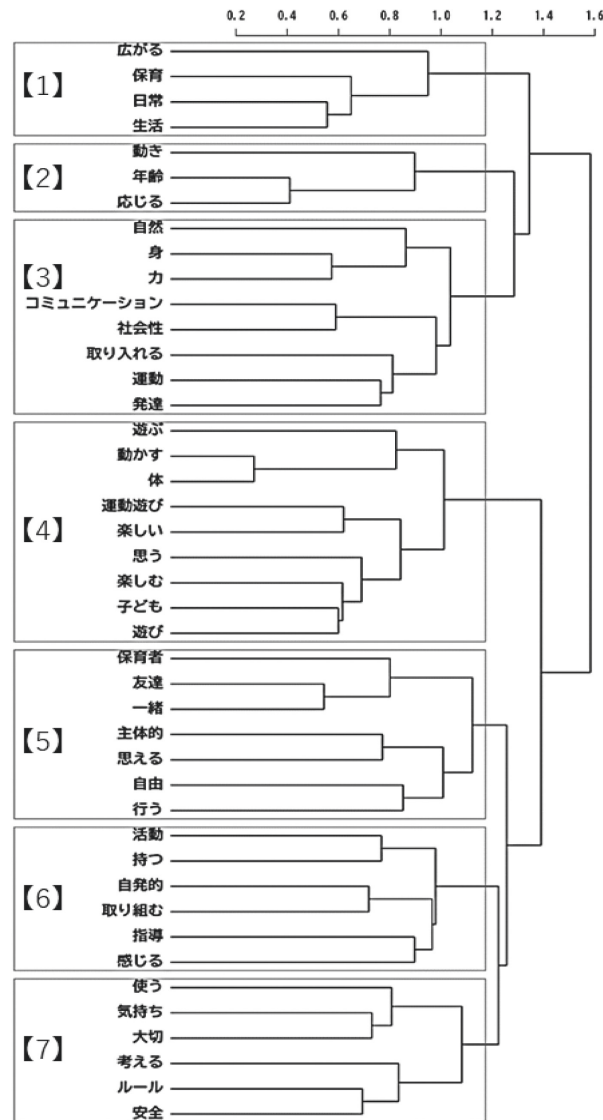


図1 階層的クラスター分析 デンドログラム
※図中の数字はクラスター番号

単語上位 30 語までを表 3 に示す。

頻出語を抽出した結果、出現回数上位 10 語として「子ども (82)」「遊び (50)」「楽しい (42)」「思う (37)」「運動遊び (34)」「楽しむ (34)」「体 (34)」「運動 (22)」「動かす (22)」「自発的 (18)」が抽出された。これら上位 10 語の出現回数は 82~18 回であり、総抽出語の 27.1% (375 語) を占める結果となった。

(2) 階層的クラスター分析

階層的クラスター分析では、単語の出現回数が 6 回以上の単語を分析対象とした。方法は Ward 法、距離は Jaccard 係数に設定し、デンド

ログラムの描写を出力した。なお、クラスター数の決定は分析ソフトの自動設定に委ねたが、クラスターの併合水準のプロット描写を出力し、クラスター数が適当であるか確認をした。また、

表 4 クラスター番号とクラスター名

クラスター番号	クラスター名
第1クラスター	日常生活や保育との繋がり
第2クラスター	年齢に応じた遊びの提供
第3クラスター	人間関係の広がり
第4クラスター	肯定的な動機付け
第5クラスター	身近な環境との自由な関わり
第6クラスター	自発的な活動への導き
第7クラスター	安全、規範意識の涵養

KWIC分析(keyword in context)によって単語を含む実際の記述を精読し、クラスター名を命名した。以下、命名したクラスター名は【 】, 抽出語は「 」、実際の記述は〈 〉と記す。

階層的クラスター分析の結果、7つのクラスターが抽出された。分析結果を示したデンドログラムを図1に示す。

1) 第1クラスター

第1クラスターは「日常」「生活」「保育」「広がる」からなり、具体的な記述としては〈日常生活や保育とのつながりを意識して行う運動。〉〈日常生活や通常保育からの広がりに関連づけて設定する。〉がみられた。そこで、第1クラスターは【日常生活や保育との繋がり】と命名した。

2) 第2クラスター

第2クラスターは「年齢」「応じる」「動き」からなり、具体的な記述としては〈年齢に応じた環境設定が大切である。〉〈年齢に応じた多様な動きを取り入れていく運動。〉がみられた。そこで、第2クラスターは【年齢に応じた遊びの提供】と命名した。

3) 第3クラスター

第3クラスターは「コミュニケーション」「社会性」「自然」「取り入れる」などからなり、具体的な記述としては〈コミュニケーションを図りながら社会性を身に付けられる運動遊びを取り入れる。〉〈運動能力だけではなく心身の健康やコミュニケーション能力、社会性を自然と養うことのできる機会。〉がみられた。そこで、第3クラスターは【人間関係の広がり】と命名した。

4) 第4クラスター

第4クラスターは「体」「動かす」「楽しい」「楽しむ」などからなり、具体的な記述としては〈子どもが楽しみながら体を動かす遊び。〉〈運動遊びは体を動かすことを目的とし、楽しく遊びの延長線上にあるもの。〉がみられた。そこで、第4クラスターは【肯定的な動機付け】と命名した。

5) 第5クラスター

第5クラスターは「保育者」「友達」「一緒

「主体的」「自由」などからなり、具体的な記述としては〈保育者や友達と一緒に楽しむ遊びの中で様々な身体機能の発達を促すもの。〉〈子どもが主体的に遊具やボールなどを自由に使って遊ぶこと。〉がみられた。そこで、第5クラスターは【身近な環境との自由な関わり】と命名した。

6) 第6クラスター

第6クラスターは「自発的」「取り組む」「指導」などからなり、具体的な記述としては〈子どもが自発的に興味を示しやってみようという思いや楽しみを持ちながら取り組む活動。〉〈運動遊びにおいては指導という形ではなく導くという思いが大切だと感じる。〉がみられた。そこで、第6クラスターは【自発的な活動への導き】と命名した。

7) 第7クラスター

第7クラスターは「安全」「ルール」「考える」などからなり、具体的な記述としては〈安全に気をつけて行う必要がある。〉〈子どもがルールや安全に関する知識を身に付ける場として活用している。〉〈保育者と子どもと一緒に安全について考える機会にもなる。〉がみられた。そこで、第7クラスターは【安全、規範意識の涵養】と命名した。

4. 考察

頻出分析の結果から、上位の語に「楽しい」や「楽しむ」などの肯定的な情意面の言葉の語が出現した。これら語のコンコダンスを確認すると、“子どもが楽しいと思えるもの”や“子どもが楽しむことを意識している”など子どもの目線に立った記述がみられる一方で、“保育者自身が楽しむことも運動遊びでは重要”や“保育者も一緒に楽しむ”など保育者目線の記述も多数みられた。館林・宮沢⁶⁾の報告からも現役保育者が「子どもの意欲や楽しさの経験を重視している」と述べており、本研究においても同様のキーワードが抽出された。

また、「自発的」や「主体的」などの子どもの行動姿勢に関する語も高頻度で抽出された。

幼児はハイパーアクティブラーナーと呼ばれるように幼児教育はアクティブ・ラーニングを中心とした主体的な教育が行われている。さらに、幼稚園教育要領の基本理念の中でも、子どもがどのように学ぶかという本質から「主体的・対話的で深い学び」を重視している。併せて、幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿⁷⁾の「自立心」の中で、「身近な環境に主体的に関わり様々な活動を楽しむ中で、しなければならないことを自覚し、自分の力で行うために考えたり、工夫したりしながら、諦めずにやり遂げることで達成感を味わい、自信をもって行動するようになる。」と具体的な姿が示されている。そのため、保育者が持つ運動遊びのイメージや保育者が日ごろの運動遊びを実践する際に意識していることに繋がったと考えられ、これらのキーワードが抽出されたと示唆された。今後、運動遊びに関する統一した定義や概念の生成する際には、肯定的な情意面の言葉や子どもの行動姿勢に関する言葉がキーワードとして挙げられることが想定される。

幼児期の運動遊びについて、保育内容の領域「健康」^{1) 7) 8)}では、「健康な心と体を育て、自ら健康で安全な生活を作り出す力を養う。」が全体目標として設定され、ねらいとして「(2) 自分の体を十分に動かし、進んで運動しようとする。」内容として「(2) いろいろな遊びの中で十分に体を動かす。」「(3) 進んで戸外で遊ぶ。」など、本研究で取り扱った運動遊びとの関連が強い内容が示されている。本研究で生成されたクラスターをみると、人との関わりに関する領域である「人間関係」との関連した第3クラスター【人間関係の広がり】や第7クラスター【安全、規範意識の涵養】が生成された。また、身近な環境との関わりに関する領域である「環境」との関連が強いと考えられる第5クラスター【身近な環境との自由な関わり】など、他の保育内容領域が主であるクラスターが抽出された。これは、幼児期の生活や遊びにおいては5領域（「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」）が複雑に関連し合いながら子どもの育ちに影響するためであると示唆される。幼稚園教育要領解説¹⁾においても、「各領域に

示すねらいは、幼稚園における生活の全体を通じ、幼児が様々な体験を積み重ねる中で相互に関連をもちながら次第に発達に向かうものであること、内容は、幼児が環境にかかわって展開する具体的な活動を通して総合的に指導されるものであることに留意しなければならない」としている。そのため、保育者は領域「健康」との関連が強いと思われる運動遊びにおいても、他の領域との相互の影響や関連性をイメージしていることが推察された。

また、幼児教育は、幼児の自発的な活動としての遊びが調和のとれた発達の基礎を培うとされている⁹⁾。河邊¹⁰⁾は「遊びを中心とした保育の核となるのは、遊んでいるかどうかではなく、子どもがどのように遊んでいるかである。」と述べており、自発的な活動としての遊びの重要性を示している。本研究で生成された第6クラスター【自発的な活動への導き】との関連がみられ、保育者は運動遊びのイメージとして大切にしていることが示唆された。

第1クラスターでは【日常生活や保育との繋がり】が生成された。千田恭子・河合亜紀¹¹⁾は日常生活における子ども一人ひとりの発達過程を見通し、理解することが主体的で楽しい活動に繋がり自己肯定感の高まりに結び付くことを述べている。日々の生活と遊びは連続性があり相互に関連していること¹⁾からも運動遊びを実践する際のイメージとして日ごろ意識していることが示唆された。

その他、第2クラスター【年齢に応じた遊びの提供】、第4クラスター【肯定的な動機付け】についても「幼稚園教育の基本」¹⁾、「保育所保育に関する基本原則」³⁾における保育者の役割の事項に基づくクラスターが抽出され、保育者が運動遊びに対して持つイメージについて整理された。

本研究では、保育者を対象として運動遊びに焦点を当て、今後の運動遊びについての定義や概念の生成に向けた基礎的データを得ることを目的とし、保育者が持つ運動あそびへの考えやイメージを調査した。平成30年に子ども・子育て関連三法令が改訂・改定され、それに伴い幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型

認定こども園教育・保育要領も改訂・改定された。本研究の結果から7つのクラスターが抽出されたが、その中でも子ども・子育て関連三法令に則った内容が複数確認された。運動あそびに焦点を当てた本研究においても、保育者はこれら三法令との関連を意識し、運動遊びに対してもイメージを持っていることが明らかとなった。

5. 今後に向けて

幼児期における身体運動のガイドラインである「幼児期運動指針」¹²⁾では、3歳から6歳を対象として幼児期の運動の在り方について指針が提示され、「多様な動きが経験できるように様々な遊びを取り入れること」、「楽しく体を動かす時間を確保すること」、「発達の特徴に応じた遊びを提供すること」の3つのポイントが示された。そのため、本研究における幼児期の運動遊びのイメージを検討する際にも強い結びつきがあると考えられる。しかしながら、これらに関連した語句やキーワードはほとんど抽出されず、具体的な運動遊びの内容や方法に関する思いや考えに対する記述は非常に少なかった。木戸貴弘・中山正剛¹³⁾が幼児期運動指針の浸透状況や運動遊び実践との関係について実施した調査では、幼児期運動指針について「しっかりと理解していた・すでに認知していた」と回答した保育者の割合が10%を下回る結果となったとことを報告している。そのため、保育者に対する幼児期運動指針の浸透度の低さが、この結果に影響を及ぼしたと考えられる。今後、運動遊びについて統一した定義や概念を検討していく際には、幼児期運動指針に示された内容や考え方も非常に参考になると考えられる。そのため、これらの課題の原因などについて引き続き調査していくことが必要である。

付記

本研究は、著者が日本保育学会第76回大会において発表した「保育者が感じる「運動遊び」とは」を加筆修正しまとめたものである。

参考文献

- 1) 文部科学省 (2018) 幼稚園教育要領解説. フレーベル館,
- 2) 山本清洋・井上勝子・城弘子 (2016) 運動遊びの現状と課題—概念の構築を巡る検討—. 豊岡短期大学論集, 13: pp. 159-168.
- 3) 岩崎洋子編・吉田伊津美・朴淳香・鈴木康博 (2008) 保育と幼児期の運動遊び. 萌文書林, pp. 49-50.
- 4) 島崎あかね (2014) 乳幼児期における運動遊びの必要性—発達段階に合わせた運動遊び—. 植田女子短期大学紀要, 34: pp. 11-118.
- 5) 水谷光弘 (2010) からだを動かすあそび 365. ひかりのくに, p. 9.
- 6) 館林拓磨・宮沢秀次 (2015) 保育士・幼稚園教諭の保育観と運動指導観. 教育保育研究紀要, 1: pp. 19-26.
- 7) 厚生労働省 (2018) 保育所保育指針解説. フレーベル館,
- 8) 内閣府・文部科学省・厚生労働省 (2018) 幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説. フレーベル館,
- 9) 津金美智子 (2017) 平成29年度版新幼稚園教育要領ポイント総整理幼稚園. 東洋館出版社, pp. 84-88.
- 10) 河邊貴子 (2005) 遊びを中心とした保育. 萌文書林,
- 11) 千田恭子・河合垂紀 (2019) 子どもの興味と表現を引き出す劇への取り組み. 富山大学人間発達科学研究実践総合センター紀要 教育実践研究 14: pp. 125-129.
- 12) 文部科学省 (2012) 幼児期運動指針ガイドブック. https://www.mext.go.jp/a_menu/sports/undousisin/1319772.htm (閲覧日: 令和5年1月5日)
- 13) 木戸貴弘・中山正剛 (2021) 幼児のより良い運動遊びを実現するための基礎的研究—幼児期運動指針の認知・理解状況と運動遊び実践との関係—. 九州体育・スポーツ学研究, 36 (2) 補遺版: p. 30.